

書評

東 栄一郎著（飯野正子監訳）

『日系アメリカ移民 二つの帝国のはざままで』

—忘れられた記憶 1868-1945—

（明石書店、二〇一四年）

丸山 浩明

一 はじめに

本書は二〇〇五年にオックスフォード大学出版局から刊行された、原書 *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese America* の翻訳版である。英語版の原書は、清水 博賞（二〇〇五年度、アメリカ学会）‘Theodore Saloutos Book Award（二〇〇五年、移民エスニック史研究学会）’、Honorable Mention in the Frederick Jackson Turner Award（二〇〇六年、アメリカ歴史家協会）‘History Book Award（二〇〇七年、アジア系アメリカ研究学会）’と、日米両国で数々の学会や協会

史苑（第七六卷第二号）

から表彰されている。本書がいかに衆目を集める卓抜した歴史・移民研究であるかの証左である。

本稿では、最初に本書の内容を簡潔に紹介したうえで、ブラジル研究に携わる評者からみた、移民研究における本書の意義と可能性にも言及したい。

二 本書の内容

本書は序章と終章を除き、全体で八章からなる四部構成の大著である。まず序章では、二〇世紀初めに南カリフォルニア大学の学生であった立石次左衛門、帆足理一郎という二人の日本人移民の言説に注目する。彼らが「人種的・国家的に帰属するしか道はない」という、日米両国から押しつけられた覇権的言説の狭間で苦闘するなかで、実はしたたかにアメリカ白人社会や祖国日本との間に心理的・政治的な関係性を維持していたという、「二重性」の実態に深い関心を寄せる。

このような日本人移民のトランスナショナルな思想や日常生活体験は、本書に通底する中心的な研究テーマである。著者はその解明に向けて、従前の国家的枠組みや一国の歴史観に縛られない、「間・国家的視点（inter-national perspective）」からの歴史分析の必要性を説く。

そして、異なる国家理念やイデオロギーをもつ二つの覇権国家の狭間に生きた戦前日本人移民の日常生活体験や、そこから派生する思考パターン、あるいは言説的策術の解明が、本書の主題であることを明示する。

第一部（第一章）では、日本人移民社会とその歴史の混沌とした始まりが描出される。一八八〇年代にアメリカへ起業移住した初期の日本人移民には、中流階級出身の高学歴者が多かった。彼らは福沢諭吉が唱えた商業膨張主義に賛同し、都市部で重要な商人階級を形成して日本人移民の指導者層になったという。

しかし、アジア・太平洋地域で西洋諸国による植民地争いが激化すると、一八九〇年代以降、日本でも植民地主義的な移民論が台頭して、集団移住と土地所有によるコロニー建設が各地で活発化した。このような軍事力支援を伴わない移住型の海外植民活動は、「東進論」あるいは著者が「日本版マニフェスト・デステイニー（明白な運命）」と呼ぶ、日本帝国による平和的膨張主義を具現化する施策に他ならなかった。その結果、アメリカ西部では白人主体の社会関係の枠組みを混乱させることなく、日本人移民による農業植民活動が進展して、自作農中心の日本人社会が拡大したという。

ところが、一九二〇世紀への転換期を迎えて新たに立

身出世論が台頭すると、「アメリカン・ドリーム」や「成功思想」にほだされた都会の苦学生や地方の農民たちが、一般労働者として大挙して海を渡った。そして、多くの学生移民が国家主義に包摂された「成功思想」の影響を受け、先達である膨張主義起業家らの仲間入りを果たす一方で、帝国臣民としての意識や使命にまったく無頓着だった地方の農民たちは、個人主義的な利益追求に邁進して反日運動を激化させ、外交上の火種となって結果的に日本人移民の渡航禁止を招いたことが明らかにされている。

このように第一章では、時代とともに商業移民から植民者、そして労働者へと大きく変化した、初期日系アメリカ社会の不均質な起源が詳説されている。

第二部（第二〜三章）と第三部（第四〜六章）では、両大戦期の日本人移民社会に焦点が当てられる。第二章では、二〇世紀初頭から一九一〇年代にアメリカ西部で激しい人種排斥や反日運動に直面した日本人エリート指導者層が、一般的日本人移民を道徳的に再教育しようとしたり、日本人移民の「白人性（ホワイトネス）」を強調したりすることで、アメリカ社会における理想的市民としての日本人移民像を構築して、その難局に立ち向かおうとしたことが解明されている。

第三章では、白人至上主義や「マニフェスト・デステイ

「二」の影響下における人種的従属という圧力の中で、「在米同胞」という、日本人ではない独自の「人種」的なマイノリティ集団が形成されていく様子が描かれている。すなわち、一九二〇〜三〇年代の十数年は、一世と二世の主従関係が交代する歴史的に重要な移行期であったという。しかし、従前の日系アメリカ移民史のパラダイムでは、彼らの歴史体験を「一世」対「二世」、「外国人」対「マージナルマン」、「親日反米」対「反日親米」、といった二項対立的な枠組みの中で単純化して処理してしまつた。その結果、激しい人種排斥に対する移民の主體的な社会交渉や策略の中で生みだされた、思考や行動のユニークな「二重性」「二文化性」への気づきが欠落していることが指摘されている。

このような問題意識の下、第三部（第四〜六章）では、一世がどのように国家規定の意味づけや主流社会によるレッテルと対峙しながら適応していったか、彼ら自身の叙述に見られる言説を手がかりに、「在米同胞」社会で創り出された新しい思想や行動について考察が行われる。

すなわち第四章では、一世がどのように自らの集团的過去の記憶を、アメリカのフロンティア理論と近代日本の民族膨張主義の文脈に置き直そうとしたか、一世歴史家の言説を拠り所に分析が進められる。彼らは日米の主流イデオロギーを借用して、白人フロンティア開拓者と一世パイオ

ニアを明示的に比較する一方で、そのイメージに合わない独身労働者を移民発展史の語りから排除していったという。また、出稼ぎ労働者を日系アメリカ市民から切り離す一方で、家族持ちの一世男性は、帰化不能ながらその日本的特徴のために白人フロンティア開拓者に類する「典型的なアメリカ人」と呼ぶなど、トランスナショナルな政治文化空間における巧妙な言説操作の実態が浮き彫りにされている。

第五〜六章では、一世から二世への世代交代期を迎えて、一九三〇年代に二世教育のための社会運動や教育活動が全コミュニティ規模で展開されたことが詳説される。揺るぎない白人至上主義の下、人種としての理想的な未来を二世に用意しようと奮闘した一世のこうした運動には、二世の職業選択や人口構成を操作しようとする試みや、「日本精神」とそれに準じた道徳的生活様式を推奨する活動、祖国日本へ彼らを送り込む越境教育プログラムの推進などが含まれていた。しかし、こうした国際主義の理想を体現しようとする試みは、彼らをより一層アメリカ社会の中で疎外し、「在米同胞」というマイノリティ集団が経験してきた人種の圧力をさらに強める結果になつたと指摘する。

第四部（第七〜八章）では、日本人移民のナショナルリズムに感知される多様で複雑な意味合いが解き明かされる。

第七章では、一世のナショナルリズムが強烈な民族意識、すなわち民族としての誇り、文化的優位性、集団としての自立や地位上昇への願望を備えており、彼らは日本帝国との絆や「日本的」であることを主張する方法によって、アメリカにおける国家帰属の新しい形の可能性を表現できたと言及する。それは白人至上主義のアメリカで、その本質的な権力構造や人種序列を混乱させない程度に人種と文化に開く意味を、一世が主体的かつ巧妙に操作していたことを物語っている。一世のトランスナショナルな生存戦略の中心的課題は、実はナショナルな意識と力であった。

第八章では、日本人移民が白人との平和的關係を求めて生存をはかる一方で、日本帝国が征服活動を押し進めたアジアの国々の出身者に対しては、差別的な眼差しを向けて対立と競争を煽ったことが、とくにフィリピン系移民との間に生じた人種葛藤を事例に挙げて細かく分析されている。一世のナショナルリズムは、移民社会の内部における階級性や多様性を抑圧しながら、正当な「日本的」思想と行為という考えを抛り所に「名誉白人」としてのアイデンティティを作り上げた。そして、コミュニティの人々をうまく説得してその考えに従わせることで、移民集団を「名誉白人たる中流市民」という型に無理やり押し込み、エスニック集団の再構築を図ろうとしたことが解き明かされる。

終章では、一九四一年の太平洋戦争勃発とともに急変した戦時下のアメリカにおける人種主義や国家主義の下で、一世のトランスナショナルな移民史が終焉するプロセスが詳説されている。すなわち、太平洋戦争前の二〇〇〜三〇〇年間に日本人移民が二つの国家間で享受してきた「間・国家的」な柔軟性や折衷主義的な社会的指向は、戦争によって完全に否定され、日本人移民はアメリカ社会の中で文化・人種・国家的に完全に他者化されてしまった。そして、戦時中のアメリカ至上主義思想の中で日本人移民は強制収容され、それまでとはまったく異なる社会的慣習やアイデンティティの採択を強いられた。もはや彼らに残された公的な自己表現の選択肢は、一点の曇りもないアメリカニズムを空しく主張するか、狂信的な親日家として孤立するしか残されていなかったという。

こうして一世の日本への愛国心は、アメリカへの強い忠誠心の表明に置き換えられ、二世たちは「モデルマイノリティ」として、「白人よりも白人化している」と賞賛されるまで自己改革したことが明らかにされている。この変化に呼応するように、戦後の日系アメリカ移民史の言説も二世たちの揺るぎないアメリカニズムの記録へと変貌した。そして、一国家の枠組みからの歴史の語りを助長する一方で、「境界地（ボーダーランド）」に生きるマイノリティの

トランスナショナルな歴史体験の真相は、移民史からも国家の国民史からも排除されてしまったという。このような少数派の歴史体験を排除し、主流派の利益に適う思想的装置として機能してきたアメリカ移民研究の暴力性に対する著者の憂慮が、本研究の原点にあるといえる。

三 本書の意義と可能性

本書が多くの読者に支持されるのはなぜだろうか。その答えの一つは、アメリカの国民形成プロセスをアングロ・サクソン系文化への同化現象と同一視する、「移民パラダイム」と呼ばれる政治化された歴史言説との決別を自らに課し、長らく等閑視されてきたマイノリティの曖昧で複雑な歴史体験を丁寧に拾い上げようと奮闘する、一人の歴史学者の微動だにしない真摯な研究姿勢への共感であろう。それはアメリカの大学に籍を置く著者自身が、日々移民を追体験するなかで辿り着いた、信念ともいえる新境地なのかも知れない。

歴史研究という行為が本質的にもつ主流派の作為による政治性や時代的特殊性の弊害から目を逸らさず、だからこそマイノリティである移民の歴史体験を一方的に国民国家の支配的言説（ナショナルリストの歴史学）に統合・従属さ

せてはならない、との警鐘は説得力をもって心に強く響く。また、これまでの移民研究によく見られる「二つの祖国間で苦闘する日系人」という抵抗者のモチーフやその感動物語は、日系人を海外の同じ「日本人」とみる一元的な視角に由来しており、それは結果的に日本人の血や文化の特殊性や優秀性を誇る政治化された言説装置として機能している場合が多いのではないか、との指摘も示唆に富み共感できる。移民自身や非日系人の言説をして語らしめる、移民体験の客観的分析と相対的理解が求められている。

このような立場から、著者は日系移民の歴史体験の理解を国民国家の支配的言説に直接的に対峙できる手段とするために、「間・国家的視点」と自ら名づける歴史分析のパラダイムを準備する。これは二〇〇〇年代前半にアメリカの歴史学界を席卷したトランスナショナルリズムの理論・方法的影響を強く受けた視角である。しかし、ここにも大きな学問の潮流に飲み込まれまいと、用心深くその渦中に踏みとどまって思慮をめぐらす著者の姿がある。敢えてトランスナショナル（越境的）の用語を避け、「間・国家的」と命名した背景には、トランスナショナルリズムを「脱領土化」「脱国家化」と取り違えて理解する誤解を回避したり、「ディアスポラ」という文脈の中でコスモポリタニズム的理想を謳歌する文化主義者のナイーブな解放論的空論とは

一線を画そうとする、著者の確たる意思表示があることを見逃してはならない。

こうして用意周到に描き出された戦前の日系アメリカ移民の「間・国家的」性格は、従順で控えめな日本人移民像とはかけ離れた鮮烈な印象を受けるものであった。すなわち、彼らは二つの帝国への同時帰属状態を常に正当化するために、両国間に生じるさまざまな矛盾に対して主体的に折衷主義を採用した。すなわち、彼らは双方のナショナルリズム論や人種主義理論の要素を選択的に取り込み融合させることで、「真のアメリカ人」となることを標榜し、その行動や言説を通じて「準白人」「名誉白人」に変身しようとしたのである。こうして、日本人移民は主流派の白人に より人種化される一方で、アジアの同胞やその他マイノリティとは異なる特権的地位や優位性を獲得する目的で、自らの人種化を図ったのである。

このような、日本人移民が戦前にみせた人種と国家の抑圧を超克する「二重性」という折衷主義的志向は、その後もし日本人の間だった性向として、善しにつけ悪しきにつけ生き続けているかのようである。たとえば、戦後南アフリカ共和国で推進されたアパルトヘイト体制に対して、世界中から激しい非難が寄せられる中、日本人は「名誉白人」という特権的な法的措置の下で経済交流を促進させた歴史

をもっている。

また、近年アメリカとの同盟強化が急速に進められる中で、アジアの隣人やマイノリティに対するヘイトスピーチが各地で顕在化している現状は、本書が描き出した戦前のアメリカ移民社会や、その構造をアジアで流用しようとした日本帝国の姿を彷彿させる。かつて世界を戦禍に巻き込んだ帝国主義的な意識が、隠微な形で我々の身体に生き続けているのか、多様なグローバル化の弊害に苦悩する今日こそ、十分な自己省察が求められている。かつてアメリカで日系人が経験した悲惨な歴史を日本で繰り返さないためにも、本書の副題である「忘れられた記憶」の再検証が必要不可欠である。

さらに、本書が提示した「間・国家的視点」は、日系アメリカ移民に限定されない世界中の移民研究に敷衍できる研究パラダイムとして、一つの大きな潮流をつくりだす起爆剤となったことを指摘したい。われわれは、国家や人種により線引き・分断されていた領域の狭間で繰り広げられた、社会階層もナショナル・アイデンティティも異なる多様な日本人移民の複雑で重層的な歴史体験を読み解く視座を手に入れたのである。

このようなトランスナショナルな空間に生起する国家権力や人種・国民理念の衝突を直視する移民研究は、これま

での個別エスニックに閉じた単眼的な移民研究の隘路を切り拓く一方で、一見平和的に見える多文化社会に隠蔽された複雑な権力構造も暴き出す可能性を予感させる。「間・国家的視点」に立つ移民研究の進展は、これまでの研究成果やそれを支えてきた歴史解釈のパラダイムまでも大きく揺るがしながら、新たな学問領域を開拓している。

最後に、評者が携わるブラジル移民研究に対しても、本書はさまざまな示唆に富み刺激的である。ブラジルはアメリカに比肩する世界的な移民大国で、日系人の数は世界最大である。しかし、日系ブラジル移民の生活世界は、アメリカ西部と比べてかなり異質である。ブラジルの基層文化社会は、約三〇〇年にわたる植民地時代に形成された混血性の強いもので、支配層をなす白人もポルトガル人を中心とするラテン系民族であった。彼らが帝政・旧共和制期（一八二二〜一九三〇年）に推進したヨーロッパ移民の積極的な導入による「白人化 (abranqueamento)」は、ゲルマン系民族やフランス人に対する憧憬と劣等感が入り交じった、「脱アフリカ化」を主な目的とする人種主義の実践であった。また、ナシヨナリズムが高揚した一九三〇年代には、国民の混血化をブラジルの避けがたい現実と認め、異人種が混濁する平和的で奔放な人間関係の推進を標榜する「人種デモクラシー」が一時代を席巻した。

このようなブラジルの歴史は、厳格なアメリカ例外主義や白人至上主義の下で、先発の日系アメリカ移民が乗り越えねばならなかった国家・人種の相剋の壁が、後発の日系ブラジル移民が直面した壁と比べて、より高く堅固で異質なものであったことを示唆している。同じ日本人移民でも、移住した時代や社会階層、そして彼らが生活する（場）の意味の違いが、彼らの日常生活体験やそこから派生する思考・行動パターン、言説的策術にどのような差異を生み出したのか、「間・国家的視点」から比較検討する意義は大きいと考える。本書は、世界各国の移民研究の道標となる卓抜した研究成果であると同時に、アメリカ論を志向しない「アメリカ研究」、日本論を志向しない「日本研究」としても優れた見識を備えた、まさに「間・学問的」研究であった。是非、一読をお薦めしたい。

（本学文学部教授）